九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドと「プレイアッド叢書」：『日記』旧版をめぐって

吉井, 亮雄
九州大学文学部

https://hdl.handle.net/2324/19364

出版情報：流域. (49), pp.22-30, 2000-12-02. 青山社
バージョン：
権利関係：

ジッドと「プレイアッド叢書」

――『日記』旧版をめぐって――

吉井亮雄

「新フランス評論（エヌ・エル・エフ）」誌を母体として一九一一年に設立された同名の単行書部門が、いくつかの危機を経験しながらも順次活動の幅を広げ、今日「王朝」と称されるまでの大出版社ガリマールに発展・成長したことは周知である。とりわけその出自たる文学関連での同社の歩みはまさに二十世紀フランス文学の歴史であったといってもけっして過言ではない。長い出版活動のなかでは多種多様の叢書が生まれたが、そのうちでもきわだって大きな役目をはたしたのは、存命作家の新作を中心とする「白色（ブランシュ）叢書」と、古典的大作家の名作をおさめる「プレイアッド叢書」である。前者は単行書出版の原点ともなったもので、赤と黒の細い枠囲みに *nrf* とロゴの入った淡いベージュ色の表紙は、わが国でも「フランス装仮綴じ」といえば多くの読者がまっさきにこれを思い浮かべるほど有名である。往時ほどの威光は放たなくなったかもしれぬが、この瀟洒な表紙をまとって自著が世に出ることを夢見る若き文学者は今なお少なくない。

いっぽう「プレイアッド叢書」は、すでに評価の定まった「古典」の収録を原則とする。時代や世紀ごとに色分けされた革装の巻を割ると、上質のバイブルペーパーにガラモンド体の活字が整然と並ぶ。とくに近年は学術版としての性格をいっそう強め、第一線の専門家による厳密な校訂をへたテクストを柱に、充実した解題や豊富な関連資料を併載するのを常とし、研究上の定本となっている場合が多い。収録対象はフランスの中世・十六世紀以降を主とするが、ギリシア・ローマの精髄や聖書・聖典をも含み、地理的にはヨーロッパ全域をはじめ多くの国々に及ぶ（数年前、谷崎潤一郎が日本人作家として初めて収録されて話題となった）。総巻数はまもなく五百の大台に達しようとしている。

本稿では、この「プレイアッド叢書」に二十世紀シリーズが新設

されるにいたった事情をジッドの『日記』旧版（フルタイトルは『日記、一八八九―一九三九年』）を中心において略述したい。同版は、一九九六―九七年に二巻本の新版（エリック・マルティ、マルティーヌ・サゲルト共編）が出たことで、続編の『日記、一九三九―四九年』とともに今後は次第に参照されなくなっていくだろうが、ジッド自身が関与した版という点では依然として重要な意味をもつ。これについても若干の私見をくわえたい。(1)

1

ロシア生まれのジャック・シフリンがパリで興したプレイアッド出版はその美麗にして典雅な印刷・造本で早くからジッドの高い評価をえた。「プレイアッド叢書」は同社の目玉としてシフリンが一九三一年に企画・創設したものである。だが小出版社の例にもれず運営資金は潤沢というにはほどとおい。経済的な基盤を固めることで叢書のいっそうの発展を願うジッドはただちにこれをNRFに接収させようと尽力した。とはいえ容易に結果がえられたわけではない。後年のジッドの回想――

この叢書はシフリンが創り、実に巧みに監修しているが、ジャン・シュランベルジェと私はそれを採用させるのにずいぶんと苦労した。合意に達するまでに二年近く辛抱づよく説いたり論争したりしなければならなかった。「あなたがおっしゃるような注目すべきものがそこにあるとは思えません」とXは頑なに言いつづけていたのだ。

（一九四三年三月十六日の日記）

Xとイニシャルで伏せられるのは、いうまでもなくガストン・ガリマールのこと。この一件にとどまらず、できるだけ危険な賭は避けたい経営者と、あくまで文学的な評価を最優先にする後見とのあいだで、類似の葛藤・軋轢がたびたび繰り返されたのはよく知られている。

ところでシフリンは単なる版元の地位におさまることなく、すでに二〇年代から、その語学力を活かしジッドと共同でプーシキンの『スペードの女王』や中短篇集をフランス語に翻訳していたし、さらに一九三六年には、共産主義に傾倒する作家のモスクワ訪問にウージェーヌ・ダビやピエール・エルバールらとともに同行したり、友人としても厚く遇された。そんな彼がジャンル別編集による全集をプレイアッド叢書から出すようジッドに請うたのは一九三八年のことである。同じNRFからルイ・マルタン＝ショーフィエ編の全集が今なお進行中であったため、新たな全集出版という計画じたいは時期尚早として退けられるが、前者の各巻分載方式とはことなり『日記』はすべてを一巻にまとめるというアイデアはジッドの心を強くひく。時代ごとの創作活動を照らすいわば補助資料としてではなく、『日記』そのものに自律的な価値と確固たる総体像をあたえ

られると考えたからだ。

かくして事は決し、実現にむけた作業がさっそく開始される。そのさいまず問題となったのは、妻マドレーヌにかかわる記述をどのように扱うかという点であった。ジッドはさほど迷うこともなくマリア・ヴァン・リセルベルグの意見を容れ、全集版でとったのと同じ方針をえらぶ。すなわち、妻を巻き込むような感情生活にふれた記述は少部数の私家版に別途まとめることにして（一九四七年に十三部のみ印刷された『今や彼女は汝のなかにあり』がその結実）、彼女が実際に手にとって読むおそれのある『日記』本体からは今回もまたこれを組織的に削除したのである。とはいえ新旧両版で異同がまったくないわけではない。プレイアッド版になってはじめて活字化された記述が少数ながら存在するのだ。たとえば一九一六年十月七日の「エマニュエル〔マドレーヌのこと〕の数語で私はふたたび一種の絶望に投げ込まれた」ではじまる一節。あるいは、一九二一年七月二十八日の記述「あの……があった日から、私は自分の精神が持続しているという完全な意識を取り戻せないでいる」のうち、「あの……があった日から」という、マドレーヌがジッドの手紙を残らず焼き捨てた事件への仄めかしは全集版では削除されていたものである。数量的には微少だが、これら結婚生活の悪化を伝える記述が採録されたのは、一九三八年四月、プレイアッド版の刊出を見ることなく妻が身罷ったことにはたして由来するのや否や。

ついで検討の対象となったのは、いまだ存命中の他者にかんする否定的・批判的な記述である。もちろんオリジナルどおりの活字化もあるが、とりわけ感情表出のあらわな箇所については、全面的な削除をふくめ、なんらかの修正をほどこす場合が多い。また先のガリマールではないが、日記や自伝的著作の常として、記載人物の実名をイニシャルに代えて無遠慮・不謹慎の誹りを回避する策もしばしばとられている。しかしながら全集版のテクストに比べると、この種の加工はむしろ減少する。全集版には採録されていながらプレイアッド版になって削除されたり、実名がイニシャルに変わったりという逆の例もなくはないが、全体的にはオリジナルの忠実な再現が増してくるのだ。理由としてまず挙がるのは、両版のあいだにすでにかなりの年月（とくに全集の第一巻から数えれば七年以上）が経過し、その間に少なからぬ同時代人がこの世を去った点であろう。さらにケースによっては、時の流れが現実の生々しさを次第に洗い流し、ジッドを当事者としての逡巡から記録者としての冷静へと誘ったためだとも考えられる。

以上にくわえて、明確さを欠く表現や無用の反復、日付の不整合（これは思いのほか多い）などを排すための微調整が主として校正刷の段階で繰り返される。作業の経過を簡略にまとめれば、まずは初校が一九三八年の九月からジッドのもとに届きはじめる。つづいて十二月四日の記述には「パリの生活はとかく寸断されてしまい創作

的な仕事ができないので、プレイアッド叢書版の『日記』の校正刷を見かえすことで苛立ちをしずめる」とある。明けて一九三九年の一月下旬、初校の点検を終了したジッドはエジプトへむけて旅立つが、途中マルセイユから収録分最後の記述をパリに書き送っている。その冒頭——

パリを去るまえに『日記』の校正刷にふたたび目を通しおえることができた。読み返してみるとエマニュエルにかんするあらゆる文章（少なくとも彼女の死までの）が組織的に削除されているので、日記はいわば「盲目」にされているかたちだ。〔一月二十六日〕

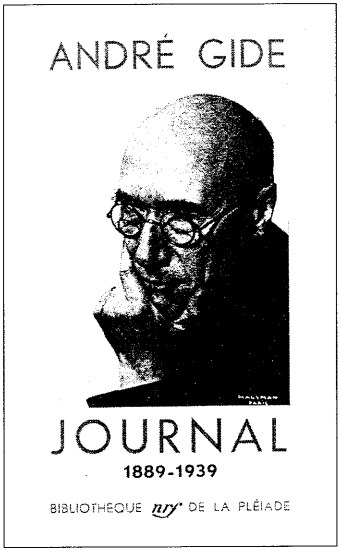
いったん決めたこととはいえ、妻にかんする記述の削除はやはりジッドの気がかりとなっていた。おそらくはそのためだろう、二月に入ると赤裸々な告白『今や彼女は汝のなかにあり』の執筆が再開され、早くも中旬には第二部が書きあげられている。そしてこれと前後して『日記』の再校が、また翌月中旬には三校があいついで逗留先のルクソールに届く。その後の点検・確認はパリのシフリンにゆだねられたようで、四月中旬にジッドがフランスに帰国したさいにはすでに最終校ができあがっていた。この点についてマリア・ヴァン・リセルベルグは同月二十二日付で次のような証言を残している——「夜、シフリンがジッドと『日記』の索引の点検をするために来訪。彼は最終校の折り丁をいくつか持参してきた。ジッドは大喜びだ。じつにオーソドックスな仕上がりである。索引の細部について長時間の話し合い」[2]。

2

おおよそ右のような作業をへて『日記』は五月二十日、ブリュージュのサント＝カトリーヌ印刷所で六千部が印刷を完了、さらに製本をまって翌六月末にはプレイアッド叢書第五十四巻として書店の棚を飾るにいたった。すでに高い威信を誇っていた同叢書に二十世紀の作家が、ましてや存命中の作家が入るのはむろん前例のないことで、このジッドをもって嚆矢とする。時代や世紀ごとに革表紙を色分けする基本方針に沿い、新シリーズには地が褐色（ハバナ）、標題片が緑という配色がえらばれた。ちなみにこの意匠については、『一九一八年以後のフランス小説の歴史』で知られる批評家クロード＝エドモンド・マニーが当時の書評のなかで「それにしてもなぜ二十世紀の作品にこんな地味でピューリタン的な褐色の装丁をあてがうのか」と訝っているが、一般読者の目にもはたしてそんな風に映ったのだろうか……。とまれ『日記』が鳴り物入りで彼らに供されたことはまちがいない。パリの有名書店いくつかのウインドーには自筆の日記帳（カイエ）が展示され、この「文学的事件」（ガブリエル・マルセルほかの評言）への関心をいやがうえにも掻き立てたのである。

まさに「文学的事件」であった。主だった新聞や雑誌はこぞって

『日記』を話題にとりあげた。ジッド自身が採集した書評だけでも保存のために分厚い専用ファイルを要したほどである。以下では、主要な書評の概観から窺える同時代の受容傾向をいくつか指摘しておこう。(3)



まず目にとまるのは、多くの批評家がジッドのプレイアッド入りを正当なことと認めている点だ。むろんその語調には幅がある。ガブリエル・マルセルなどは、前世紀までの古典的作家を対象とする叢書にあって「ジッドのために例外的にとられた措置」を好意的に指摘するにとどめるが、いっぽう熱い賛同を隠さぬ論者もまた少なくない。たとえばフランソワ・ド・ルーは次のように述べる――「シフリン氏がこの叢書にジッドの『日記』を入れたことはまことに賞賛に値する。現代の作品で古典となるものがあるとすれば、それはまちがいなくこの作品である。シフリン氏は過つおそれなく将来の選択を見通しているのだ」。

大方においてジッドの叢書入りが歓迎されたのは、ルーの言を俟つまでもなく、なによりも『日記』自体への高い評価によるが、評価を下すにあたって批評家たちが一様に注目したのはそれが一巻本として出版されたという事実である。全集での各巻分載や「新フランス評論」誌上での断片的な掲載をふまえての発言だけに当たり前といえば当たり前のことだが、そこには携帯に適し随時の読書を可能にするといった実利的な感想ばかりか、もっと内容にふみこんだ積極的な価値づけが認められるのである。代表的な意見として、アドリエンヌ・モニエの書評から次の一節を引いておこう――

プレイアッド叢書の一冊として『日記』を出版するというのは名案である。まとまったかたちで読むのが好ましいからだ。私はすでに「新フランス評論」で読んでいた考察を再読しているが、以前よりずっとはるかに重要なもの、あるいはずっとはるかに魅力的なものに映って見える。それらの考察がこの一巻本では本来の輪郭を描き、真実の光を放っているからだ。

分断や細分化からはなかなか見えてこない「総体のもつ密かに意味ぶかい複雑さ」(ドニ・ド・ルージュモン)。ジッドとシフリンの狙い

はたしかに的を射たといえるだろう。

また批評家の大半はテクストの網羅性を話題にとりあげる。夫婦生活にかんする記述の削除に言及する者も、そうでない者も、眼前の書物を基本的には完全版テクストと見なしているのである。おそらく彼らはマドレーヌにかかわる箇所が点線に置き換えられているのを見て、削除部分はすべてこの方法で指示されていると考えたのだろう。しごく当然なことではある。だが実際には、プレイアッド新版で一般にも広く知れわたったように、このとき刊本から漏れた記述はおよそ六百頁、なんと全体の三割を越えるのである（とくに最初の二年分の記述は完全に捨てられていた）。しかしまた同時に、この大量の削除をプレイアッド旧版の欠陥と断ずることは厳に慎まなければなるまい。というのは、すでにNRF版全集の編集段階において、自筆原稿からおこしたタイプ稿をもとに取捨選択の作業がおこなわれていたからだ。いわば『日記』の「構成」はその時点でほぼ完了していたのである。たしかにジッドは日々の記述をつうじて自身の多面性をあますところなく提示したいと強くのぞんでいた。だがそのことと、芸術家の視点から著作のかたちをととのえることとは必ずしも矛盾しなかったのではあるまいか。じじつ彼自身の書簡にも同時代人の証言にも大量の削除を悔やむことばは見あたらない。ジッドにとって自らの総体的イメージとは、作為を排除しない一種の理想型なのであり、それを決定的に歪め崩すおそれがあるのはただひとつマドレーヌの隠蔽だったのである。点線による削除箇所の指示が彼女の記述にかぎっておこなわれたこと、これ自体がすでに無垢な選択であるとは信じがたい。

『日記』が完全版テクストと見なされた背景にはジッドによる他者評価の辛辣さもあったのではないか。というのは、当時の書評にほぼ共通するもうひとつの傾向として「遠慮のなさ」への言及が挙げられるからだ。出版にむけた準備段階で必要に応じ緩和措置をとったとはいえ、ジッドの筆は相当数の同時代人にたいしてあいかわらず厳しい。たとえば画家のジャック＝エミール・ブランシュを評して――「彼は何ひとつ欠けるところのない人間である。だから彼は想像力というものをもちあわせないのだ」[4]云々（一九一六年十一月五日）。第三者からすれば、これほど率直な見解が披瀝されるかぎりはジッドの自己検閲による削除箇所はない、たとえあったとしてもごく少数のはずだ、そう考えたくもなろう。イニシャルによる匿名化もまた同様の推測を誘う要因となったはずだ。ちなみに上述のような忌憚のない人物描写については、不作法を責める声もあるが、全体としては誠実さの証ととる好意的な解釈が支配的である。

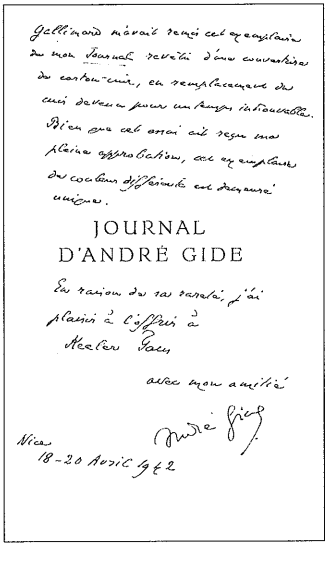
3

すでに記したように初版は六千部が刷られた。当時としては相当の部数だが、これが飛ぶように売れ、やがてNRFのなかでは増刷が話題となってくる。しかしすでにそのときジッドは

いくつかの編集上のミスに気づいていた。第一次大戦中の記述で配列が必ずしも年代順になっておらず、また二カ所で二十行以上におよぶ重複があったのだ。当然のことながら著者としてはこれを機に修正を希望する。だが細かな誤植の訂正はともかく、若い頁での大幅な組み替えや削除は必然的に索引の全面改訂を迫ることになり、またそれによって新たな誤りも生じかねない。結局はシフリンの懇請を容れて「刊行者の辞」にその旨を追記することで問題は決着した。こうして第二版は翌一九四〇年、春の訪れとともに書店に並んだが、それでもまだ読者の求めはとまらず、さらに一年後には第三版が刊行されるのである。ただし同版は初版のテクストをそのまま再録したもので、第二版での細部の修正はまったく考慮していない。これはまず疑いなく戦時の混乱に起因する単純な手違いであって、ジッド自身の意志によるものとは考えにくい。じじつ彼が一九四八年に第四版を世に問うにあたり依拠したのは第二版のほうであった（若干数の新たな修正を含むこの第四版が以後ながらく定本として一般に流布）。

ところで第二版をめぐっては興味ぶかいエピソードがある。いまだ広くは知られていないので話のついでに紹介しておこう。

たまたま筆者の手元には初版とならんで、それと同じように薄手のカバーをまとい簡素な函に入った第二版がある。一見したところ初版の外装となんら変わりがない。だが函から取り出しカバーをはずせば、そこにあらわれるのは今やすっかり目になじんだ褐色と緑の装丁ではない。背にほどこされた金線の装飾こそ変わらぬものの、表紙全体が鮮やかな赤一色、しかも粒起革に似せてはいるが紙装だとただちに知れる。もちろん一般に出まわった第二版ではない……。実はこの異装本の存在についてはジッド自身が事情を明かしている。前扉のほぼ全面を費やし次のような献辞を書き込んでいるのだ――


Gallimard m'avait remis cet exemplaire de mon Journal revêtu d'une couverture de carton-cuir, en remplacement du cuir dévoré pour un temps introuvable. Bien que cet ornat ait reçu ma plaine approbation, cet exemplaire doit rester mien.

JOURNAL
D'ANDRÉ GIDE

En raison du ravitaillé, j'ai plaisir à l'offrir à
Marcel Jouhandeau
avec mon amitié
André Gide
Nice
18-20 Août 1942

一時的に入手難となった本革に代えて革様の加工紙で装丁したこの『日記』をガリマールが私にゆだねていた。その試みは私の完全に承認するところだったが、〔結果的に〕表紙の色が違うこの見本はただ一冊かぎりのものとなった。／希少であるがゆえに、これをキーラー・ファウスに献ずるのを喜びとする。／友情をこ

めて、アンドレ・ジッド。ニース、一九四二年四月十八―二十日。

ここに名のあがるキーラー・ファウスはアメリカの若き外交官で、ジッドとは前年暮から文通関係にあったが、この四月中旬にいたって赴任地ヴィシーから尊敬する作家の疎開先に足をはこび、数日間にわたり彼と行動をともにしたのである。いっぽう正確な時期は不明だが、ジッドはそれに先立ち「万一の事態にそなえて少なくとも一揃いは保存しておくため、開戦以後の『日記』の原稿をアメリカへ持ち運ぶようにとファウスにゆだねていた」[5]という。ならば、直接相見(あいまみ)えた新たな友人への個人的な贈り物として他ならぬプレイアッド版『日記』の異装本をえらんだのもそのこととけっして無関係とは思えない。ちなみにこの赤一色の装丁は、色調の微妙な違いはあるが、数年後やはりプレイアッド叢書の一巻としてジッドが編纂した『フランス詞華集』(一九四九年刊)に転用され、その後もドイツ、イタリア、スペイン各国の『詞華集』(フランス語とのバイリンガル版)を飾ることになった。

上記の逸話を生む背景ともなった第二次大戦は、さらに大きな視野でとらえれば『日記』の受容にどのような影響をおよぼしたのか、最後にその点についても一言しておこう。ヨーロッパが日々緊迫の度合いを強めていた当時の状況を念頭におけば、一個人の内面を綴った分厚い書物などは時勢にそぐわず大きな反響は期待できないと考えられがちだ。ジッドの周辺でも当初はそのような懸念がささやかれていた。だが実際には戦争はむしろ『日記』の成功の大きな要因になったとさえいえるのである。初版出来の三カ月後、シフリンはジッドに「前線や兵舎に『日記』を携行する者が多い」と知らせているし、また同じころ「フィガロ」紙に掲載されたアンドレ・ルソーの書評には次のような一節が見いだせる――

今週ふたたびジッドの『日記』をとりあげるのは、先の戦争中、特に一九一四年の夏から秋にかけて彼が書き記したページに立ち返るためだ。仕事や日々の暮らしが混乱をきわめ、戦闘に動員されないフランス人が目的を失った生活のなかでひととき自分を信じたくなるとき、彼らは、同様の状況にあって自らの真の務めを見定めようとしたひとりの作家のほうにおのずと向かうのである。

かくのごとく『日記』によって内省的な読書体験を味わったフランス人は数多いが、最も有名なのは一九八三年に戦時の日記が公刊されたサルトルの例であろう。その真摯な証言を引くのをもって、この拙い一文の結びにかえることとしたい。サルトルはすでに全集版でジッドの考察に眼を通していたが、当初の印象は「ひどく退屈」と、お世辞にも芳しいものではなかった。だが一九三九年九月、配

属先のマルムーティエでボーヴォワールから送られてきたプレイアッド版を通読するや、「この作品にはすべてがある。ただ覆い隠されていただけだ」と述べて、それまでの判断が完全に誤りだったと認めている。そんな彼が再読にあたってまず繙いたのもやはり一九一四年の記述だったのである――「私は私の戦時の日々とともに彼の戦時の日々を感じとる。〔…〕そうせよと促すような挿話や考察がひとつならずあるだけに、私は私の戦争を彼の戦争と同化させて、この不確かで未知の将来を、すでに生きられ〈以後〉をもつものに変えるのだ」(6)。

註

(1) ちなみに『日記』各版の変遷をあつかった研究として、アントン・アルブラス『ジッドの「日記」――プレイアッド版にいたる道』なる好著がある（Anton ALBLAS, *Le «Journal» de Gide : le chemin qui mène à la Pléiade*, Nantes : Centre d'Études Gidiennes, 1997）。本稿はその論述に負うところが大きい。

(2) [Maria VAN RYSSELBERGHE], *Les Cahiers de la Petite Dame, III. 1937-1945*, Paris : Gallimard, 1975, *Cahiers André Gide* 6, p. 130.

(3) 本稿で言及・引用する書評の出典は以下のとおり――Adrienne MONNIER, compte rendu dans la *Gazette des Amis des Livres*, juillet 1939 ; Gabriel MARCEL, «Le Journal d'André Gide», *Temps Présent*, 28 juillet 1939 ; François de ROUX, «André Gide : Journal», *L'Intransigeant*, 11 août 1939 ; André ROUSSEAUX, «Le Journal d'André Gide en 1914», *Le Figaro*, 9 septembre 1939 ; Denis de ROUGEMONT, «Au sujet du *Journal* d'André Gide», *La N.R.F.*, 1er janvier 1940 ; Claude-Edmonde MAGNY, «Le Journal de Gide à la Pléiade», *Esprit*, février 1940.

(4) ただしこの記述を読んだブランシュ自身はジッドに手紙を送り「友人が友人にくわえうる侮辱のうち最も私心のない侮辱」と伝えている。Voir la *Correspondance André Gide - Jacques-Émile Blanche 1892-1939*, Paris : Gallimard, 1979, *Cahiers André Gide* 8, p. 305.

(5) *Les Cahiers de la Petite Dame*, op. cit., p. 304. ファウスについて付言すれば、彼は外交官の立場を利用して、ヴァレリーの末期の苦痛を和らげるために必要な薬剤の調達に尽力したことでも知られている。

(6) 出典は以下の増補新版によって示す――Jean-Paul SARTRE, *Carnets de la drôle de guerre. Septembre 1939-Mars 1940*, Paris : Gallimard, 1995, p. 34.

〔付記〕なおシフリンの以後の活動について、本文ではその機会を失したので、ここで簡単にふれておこう。理由は不詳だが一九四一年六月、彼の乗った船がマルチニック島到着直前になってカサブランカに引き返すという事件があった。このためシフリンは経済的に困窮するが、ジッドとエミール・マイリッシュ夫人からの送金によってやがて難を逃れ、それを機にニューヨークに移住、かの地でパンテオン・ブックスを創設した。この出版社からは『日記抄、一九三九―四二年』や『テセウス』の初版をはじめ、数点のジッド作品が刊行されている。